

復興支える長期的支援を

ネパール地震 山本教授、現地活動を報告

大地震に見舞われたネパールで医療支援に携わった長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(51)が12日、長崎市の長崎大で現地での4日間の活動を報告した。復興を支える長期的支援の必要性を訴えた。



山本太郎教授

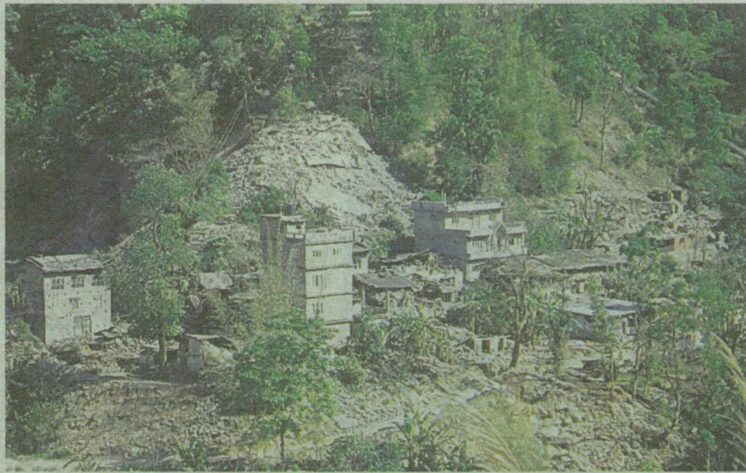
山本教授はネパールの研究者との共同研究のため、8月に現地を訪問することになっていた。地震の起きた4月25日の直後、ネパールに拠点がある国際医療NG

OのAMDA(本部・岡山市)に連絡し、AMDAと長崎大から共同派遣されることになった。4月30日に首都カトマンズに到着し、翌日、北東に約100キロ離れたカディチョウル地区に入った。通常なら車で3時間ほどだが、土砂崩れなどで約5時間かかったという。余震が続いていたため地

元の病院の中庭にベッドを並べ、AMDAのメンバー約10人と活動した。山本教授は、安全な水の飲み方や手の洗い方、廃棄物の処理など公衆衛生について患者らを指導した。

ネパールには山間部に集落が点在していて、患者は4〜5時間かけて診察を受けに来ていた。そのほとんどが初診だった。家や家族、唯一の財産であるヤギや牛などを失った人が数多くいた。山奥の集落の被害は把握できておらず、これから医療面などで様々な問題が持ち上がることが予想されるという。

山本教授は2010年のハイチ地震や11年の東日本大震災でも被災地で医療支援にかかわった。「別の大きな災害が起きればネパールへの注目度は下がる。共同研究のつながりを通して切れ目なく支援できれば」と話した。(八尋紀子)



がけ崩れで家が押し潰された集落。倒壊した家を片付ける人たちが、いずれもネパール、長崎大提供